

採種栽培のためのもみ枯細菌病防除の指針

農業試験場

1 技術の要約

採種栽培のためのもみ枯細菌病防除の指針を作成しました。採種栽培の育苗期から本田期にかけて、複数の防除手段を組み合わせることで、本病を効果的に防除し、健全な種子を生産することが可能になります。

2 技術の内容

イネもみ枯細菌病は、種子によって病気が伝染する病気です。育苗期の苗に生育不良を起こす苗腐敗症と、本田で穂に褐変症状を起こす穂枯症があります。

苗腐敗症の防除は、育苗初期の適切な温度管理に加えて、テクリード C フロアブルによる種子消毒とカスミン剤（液剤、粒剤）の播種時処理の体系処理などを行うことが有効です（図 1）。穂枯症の防除は、健全苗の移植やイソチアニルを含有する苗箱施薬剤（スタウト、ルーチン等）の移植当日処理、オリゼメート粒剤の水面施用などが有効です（図 2）。これら防除手法を組み合わせることで、体系的に処理することで、苗腐敗症・穂枯症の発生を抑え、生産する種子の病原菌密度を低減し、健全種子を生産することが可能になります（図 3）。

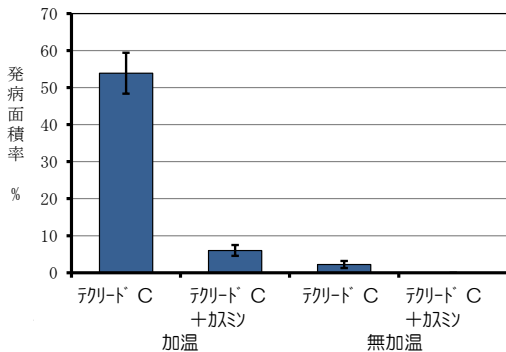


図 1 加温有無と薬剤体系が苗腐敗症に及ぼす効果

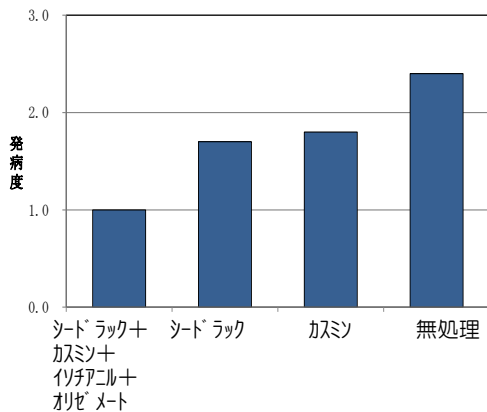


図 2 体系防除の穂枯症に対する効果
全ての区で種子消毒（テクリードCフロアブル）を実施

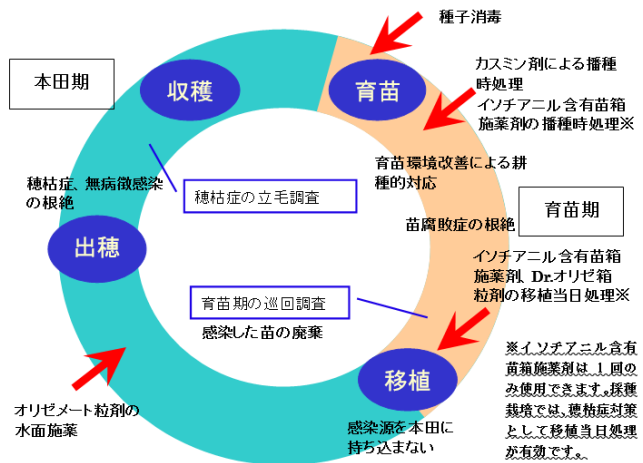


図 3 伝染環と防除方法